

世界の諸地域の英語
—ヒスパニック系住民の英語—

清 水 あつ子

Varieties of English around the World:

English Spoken by the People of Hispanic Origin in the United States

SHIMIZU Atsuko

This paper intends to find out about the interference of Spanish language over the English spoken by the people of Hispanic origin whose first language is Spanish.

In the first chapter, we make a survey of some of the demographics concerning the aspects of life which have been found correlative to the language(s) spoken by those people.

The second chapter deals with the syntactic, semantic and phonological features found in the English spoken by those people (henceforth Hispanic English) but absent in the standard varieties of the language. By comparison of the phonological systems of the two languages, we also try to predict the cases of interference likely to be found in pronunciation.

In the third chapter, we examine the recordings of the interviews with speakers of Hispanic English in Fresno, California, conducted as a pilot survey for further researches, and analyze their pronunciation to see if we can find cases of interference predicted in the previous chapter.

The findings of this brief survey suggest that the degree of interference concerning the realization of some sounds is likely to be correlated with the age of one's first exposure to English, however, that is not the case with other sounds. It remains to be investigated what factors are involved in the persistence of particular interferences and whether there are factors peculiar to Hispanic English.

《特別研究第2種》

世界の諸地域の英語

—ヒスパニック系住民の英語—

清 水 あつ子

はじめに

本稿では、近年アフリカ系アメリカ人の人口をはるかに超えて、アメリカ合衆国¹⁾における最大のエスニック集団とされる、いわゆる「ヒスパニック」系住民²⁾について人口・職業・学歴などの状況を諸資料に基づいて把握したうえで、彼らの使用する英語の統語・語彙・発音面に見られる特徴を先行研究を参照しつつ概観したのち、カリフォルニア州中部のフレズノ市における言語調査の結果をもとに、彼らの言語的背景および英語の発音についてのおよその傾向を考察する。

1. ヒスパニック系住民の現状

1.1 人口

2006年の段階で、ヒスパニック系住民の人口は4千4百万人余りにのぼり、米国総人口の15%を占めている。これは非ヒスパニック系白人（以下、アングロとする）が66%を占めるのに次いで二番目に多く、アフリカ系アメリカ人の13%を超えて最大のエスニック集団となっている（Hidalgo 2008）。2010年に行われた国勢調査の結果が判明すれば、ヒスパニック系住民の占める比率はさらに上昇していることが予想される。さらに、「非合法移民」（undocumented immigrants）³⁾の数は正確には把握できないものの、2010年2月11日の*The Los Angeles Times*によれば2009年の段階でおよそ1千80万人と推定されており、これを算定すればヒスパニック系住民の比率は既に全米の18%を超えていることになる。各地からの絶え間ない流入と高い出生率があいまって、ヒスパニック系人口は増加を続けており、2008年2月の国勢調査局の予測によれば、2050年には全米人口の24.4%を占めるだろうとされる。

1.2 出生地と居住地域

ヒスパニック系住民のうち、米国生まれが59.9%、国外で出生して市民権を持たないもの28.85%、市民権を得たものが11.1%となっているが、ここでも非合法移民とその子弟については統計の対象外である。⁴⁾ 居住地域は全米にわたるが、ヒスパニック系住民の29.5%がカリフォルニア州、18.9%がテキサス州に集中しており、この2州だけで全体の約半数にのぼる。また各州の人口に占める比率で見ると、特に高い割合を占めるのがニューメキシコ州の44%、カリフォルニア州の35.9%、テキサス州の35.7%である。

1.3 学歴

ヒスパニック系住民のなかで高校を卒業している者は59%にすぎず、この数字は米国全体の高校卒業率85%に較べて著しく低い。ヒスパニック系住民の中でも米国生まれの場合は75%が高校を卒業しているのに対して、外国生まれでは48%で、およそ2人にひとりしか高校を卒業していないことになる。さらに、大学卒業者はヒスパニック系住民のわずか12.4%で、米国全体の大学卒業率28%の半分以下であるが、これも内訳を見ると米国生まれでは16%、外国生まれでは10%となっており、ヒスパニック系住民の学歴が全体的に米国平均よりも低く、とりわけ外国生まれの場合に著しく低いことが見て取れる。このことは、成人ヒスパニック系住民の58%が外国生まれであり、その多くは母国でじゅうぶんな教育を受けていないことを反映していると考えられ、こうした低学歴の移民の流入が続く限りはこの比率もあまり変化なく続いていくであろうと予測される (New Strategist Publications 2007)。

1.4 収入

学歴の差は収入に如実に反映されており、ヒスパニック系住民の所帯あたりの年収は2005年で35,967ドルと、全米平均の46,326ドルの8割弱にとどまっているが、ヒスパニック系でも大学卒の所帯主であれば65,149ドルと、全米平均を大きく上回る。そのいっぽうで高校を卒業していない場合は男女とも大卒者の半分以下の収入しか得ていない。ヒスパニック系住民のなかで貧困層が占める比率は1990年の28.1%から2005年の21.8%へと大幅に減少しているが、2005年の全米の貧困者の割合が12.6%に過ぎないことを考えると著しく高い比率である。ヒスパニック系人口の増加に伴い、全米の貧困者層の中でヒスパニック系の占める割合は逆に17.9%から25.4%に上昇し、米国の貧困者の4人にひとりにはヒスパニック系という計算となる。また、ヒスパニック系の母子家庭では58%が貧困家庭である。

1.5 職業

ヒスパニック系の男性の就業率は80%を上回り、全米の男性平均よりも高いのに対して、女性の場合は全米の女性平均よりも低い56.1%の就業率にとどまっているが、これはヒスパニック系の家族では概して子供の数が多く、女性が家庭で育児にあたるという事情も影響していると考えられる。職種

で見ると圧倒的に農業・漁業・林業や建設関係などの肉体労働が多く、専門的職業についているのはヒスパニック系の中でわずか17%（全米平均では35%）にすぎない。肉体労働者が多いことは1.3で述べた低学歴の問題と深くかかわっていると同時に、英語を話せない成人の移民が多いことも一因となっている。

1.6 使用言語

ヒスパニック系住民が必ずしもスペイン語話者であるとは限らない。では、彼らは英語・スペイン語のどちらをどのように使用しているのか。2000年の国勢調査では、5歳以上のヒスパニック系住民のうち約2割は家庭で英語のみを使用していた。残りの8割が家庭でスペイン語を使用し、そのうちの約4割が「英語はうまくない」(speak English less than very well)と答えている（清水 2010）。家庭でのスペイン語使用の比率にはここ数年で大きな変化は生じていないものと思われ、国勢調査局の2005年の資料では総人口の12%が家庭でスペイン語を使用しているとあるが、総人口に占めるヒスパニック系住民の比率が約15%であることからみて、やはりヒスパニック系の中でも2割ほどは家庭で英語のみを使用するようになっており、残りの8割が家庭でスペイン語を使用していると考えられる。しかしそのなかの「英語はうまくない」人々の比率は2000年の約40%から2005年には47.8%に増加しており、家庭でスペイン語を使用する人々の半数近く、ヒスパニック系住民全体の38%余りが英語をうまく話せないことになるが、おそらくこのことは外国生まれの成人の移民の増加を反映しているのであろう（1.3を参照）。

1.7 スペイン語の維持

Rivella-Mills (2000)⁵⁾の調査では、出出国⁶⁾の言語であるスペイン語を維持することは重要だと思うと答えた人々はヒスパニック系住民の一世で88%、二世で100%、三世では半数の50%という結果が示されている。一世より二世のほうがスペイン語の維持に積極的であるのは興味深い。米国で生きていくために英語の習得が緊急の課題である一世よりも、米国生まれ、米国育ちの二世たちのほうが父母の国の言語や文化を失いたくないという意識が働くのであろうか。三世となると、スペイン語の維持を重要視するのは半数に過ぎない。四世、五世は調査対象となっていなかったが、おそらく世代が進むにつれてスペイン語の維持への関心は薄れていくものと思われる。ヒスパニックとしてのアイデンティティとスペイン語使用との関係については、一世の68%が「スペイン語を話さなくてはヒスパニックとは言えない」と考えているのに対し、三世ではそう考える者が皆無であった。

スペイン語の維持には世代だけでなく社会階層との相関も指摘されており（Hidalgo 2008）、社会階層が下であるほどスペイン語が使用され、階層が上であるほど英語使用と二言語使用が多くなるとみられるが、このことは1.3—1.5に述べた学歴と、それに密接に関係する職業・収入の要素とを反映していると考えられる。すなわち、英語の使用と高学歴・専門的職業・高収入に相関がみられ、その一方でスペイン語の使用と低学歴・肉体労働・低収入が結びつく。米国における学校教育を長く受けたものは英語の習熟度も高いので英語使用の度合いが増し、また収入も多いので上の階層に属するこ

とになり、さらにまたそのような家庭の子弟は英語に習熟しやすく、高学歴を達成しやすいという連鎖の中でスペイン語の維持は行われにくくなって行くが、階層が下の群ではその逆の連鎖の中でスペイン語が維持されるのであろう。「社会的・文化的な同化の代償としてスペイン語が失われていく」(Hudson et al. 1995: 148) との見方をとれば、米国における社会的成功と、世代が進むことによる文化的同化がスペイン語の喪失に関与していると言えようが、だからといって米国におけるスペイン語使用者が今後減少の一途をたどると単純に予測することはできない。なぜなら合法・非合法を含めた成人のヒスパニック系移民は現在も続いているからで、多くの貧しい一世たちの流入により、スペイン語使用者の数はむしろ増加していく可能性も大いに考えられる。

2. ヒスパニック系住民の英語

世代と階層により言語意識に差はあるものの、非合法移民を含まない統計で総人口の12%が家庭でスペイン語を話し、その半分近くが英語は「うまくない」とすると、単純計算で総人口の6%近くが多かれ少なかれスペイン語の影響をうけた英語を、不自由ながらも話していることになる。さらにまた、家庭ではスペイン語を使用するが英語も「うまく話せる」と答えた人々の英語にもスペイン語の影響が予想されるし、英語しか話さないヒスパニック系住民の英語も、アングロの英語と同じとは限らない。

2.1 Chicano English

Chicano (女性形: *chicana*) は主としてメキシコ系のヒスパニック系住民を指す名称で、スペイン語の *mexicano* (メキシコ人) が語源とされるが⁷⁾、彼らの使用する英語を一般的に Chicano English と呼ぶことがある。しかしその意味するところは必ずしも一定しておらず、研究者の間でもこの用語の定義については大きく分けて3通りの立場が存在する (Fought 2003):

- (1) スペイン語母語話者による英語習得過程に生じる、一時的な英語の形態
- (2) 英語・スペイン語の二言語使用者および英語のみの使用者によって使われる、スペイン語の影響を受けた英語
- (3) 英語を母語とするメキシコ系住民によって用いられる、一種の民族方言 (ethnic dialect)

上記(3)の立場をとる Santa Ana (1993) は、アングロの英語とは異なる特徴を持った Chicano English が、スペイン語を話せないヒスパニック系住民のアイデンティティの新たな拠りどころとして機能しつつあると指摘しており、これは今後のヒスパニック系住民の言語使用を考える上で極めて示唆に富む考え方であるが、民族方言としての Chicano English の研究、および比較対象としての周辺地域のアングロの英語方言についての研究は、今後の充実を待たねばならないとみられる。

本論では、特に Chicano English という名称を用いずに、上記(2)の種類の英語を以下では「ヒスパニックの英語」と呼ぶこととする。

2.2 Spanglish

この語も、広い意味ではヒスパニック系住民の英語を指して、Chicano Englishと同義に用いられることがある (Fought 2003)。しかし英語とスペイン語の間でのコードスイッチングが頻繁に行われるという点では共通しているものの、Spanglishはスペイン語の統語構造を基盤にしばしば英語の語彙が組み込まれ、時に特有の語義変化を経た語彙が認められるもので (Polkinhorn et al. 2005)、構造的には英語というよりはむしろスペイン語の範疇に属しているため、ヒスパニック系住民の「英語」を対象とする本論では扱わない。

2.3 文法的特徴

ヒスパニックの英語には標準英語とは異なった様々な文法的特徴が認められるが、なかにはアングロの用いる非標準的変種、あるいはヒスパニック以外のエスニック集団の用いる英語にも共通して認められるものが少なくない。3人称単数における人称と活用形の不一致・Be動詞過去形の単複の不一致・不規則動詞の規則活用化・再帰代名詞の異形 (hissself, theirselves) などは他の非標準的な変種にも一般的にみられる現象であり、また二重否定や、習慣をあらわすbe (例: Me and my mom be praying in Spanish. —Fought 2003: 96) などは黒人英語に特に顕著な現象である。

他の非標準的方言や黒人英語にみられない特徴として、仮定法の文でのwouldの二重の使用があげられる。すなわち主節と条件節の両方にwould + 過去完了形が用いられ、

例: If Thurman Thomas *wouldn't've* dropped those fumbles, then the Bills *woulda* won.

(Fought 2003: 96) のようになるが、これはスペイン語の接続法で以下のように過去完了のhubiera(n) + 過去分詞が条件節と主節に繰り返されるので、その影響と考えられる:

例: Si Thurman Thomas no *hubiera perdido* la perota, los Bills *hubieran ganado*.

Fought (2003: 100) はまた、彼女の調査対象となったロサンゼルススのヒスパニック系住民が現在の能力を表わすのに、頻繁にcanではなくてcouldを用いる現象を報告しており、She could speak Swahili.といえば単純に「彼女はスワヒリ語が話せる」の意味であるという。上記の仮定法の例とは異なり、これはスペイン語の影響とは考えにくい。スペイン語では現在の能力に対してはpoderの現在形を用いてPuede hablar Swahili.となるし、過去形を用いてPude hablar Swahili.とすれば、過去における能力を意味することになってしまうからである。さらにまた、仮定の意味を含むならば接続法のpodríaを用いるわけで、この現象に関しては起源が不明と言わざるを得ない。⁸⁾

前置詞の用法には、明らかにスペイン語の影響と思われる特徴が認められる。スペイン語の前置詞enは英語のin, on, atに対応する語義範囲を有するため、これらの英語の前置詞の使い分けに混乱が生じるというケースが、その典型的なものであろう。例えばWe're really supposed to get out of here *on* June.やHe was *in* a beer run. (いずれもFought 2003: 100-101) のように、他の変種であればinのところにon, あるいはその逆の置き換えが頻繁に生じる。⁹⁾ さらに興味深い現象としては、「～が...できるように」の意味でFor my mom can understand. (Fought 2003: 100) のようにforを多用することで、この句に相当するスペイン語はPara que mi mamá pueda entenderとなるが、スベ

イン語のpara que (so thatにあたる) プラス接続法の構文の前置詞paraがこれに対応する英語の前置詞forに、接続詞queが英語のthatにそれぞれ別個に置き換えられた後にthatが省略されたものと考えることができる。

2.4 語彙的特徴

(Fought 2003) によれば、特に若者の使用する俗語的表現はヒスパニックの英語にも数多く存在し、他の非標準的な変種にも共通して見られるものが多いなかで、to dateの意味でのto talk to, guyの意味でのfoolなど、ヒスパニックの英語に特有と思われるものも観察されているが、スペイン語との因果関係は必ずしも認められない。しかし「白人の」という意味で使われるamerican, to askの意味で使われるto tellなどは、それぞれスペイン語のamericano/a (ヒスパニック系住民やアフリカ系アメリカ人でなく、白人の米国人を指すことが多い) と、decir (英語のsayとtellにまたがる語義範囲を持ち、文脈によってはaskに相当する意味も持ちうる)の影響を受けているのではないかと考えられる。

2.5 音声的特徴

ヒスパニックの英語の音声的特徴の中にも、語末の-ingの子音が/ŋ/でなく/n/になる現象や (Martínez 2006), /θ/→[f] の実現など (Fought 2003) 黒人英語と共通の特徴がみられるとの指摘もあるが¹⁰⁾、文法・語彙面での特徴と較べると、スペイン語による顕著な干渉はるかに広範囲に認められるのが音声的特徴である。そのような、いわばスペイン語の名残のような特徴は何世代か経つうちには失われそうなものであるのに、実際には四世、五世の世代にまで残る場合も見られるという (Martínez 2006)。以下に両言語の音体系¹¹⁾の違いから予想される、ヒスパニック英語へのスペイン語の干渉を概観する。

2.5.1 母音の干渉

/i//e//a//o//u/の5母音の体系を持つスペイン語の母語話者が話す英語の母音には、当然のことながらスペイン語による干渉が予想される。しばしば報告されているのはKIT¹²⁾の母音/i/が緊張母音として実現されることで (Fought 2003, Martínez 2006), pickとpeak, fillとfeelは同音となってしまうのだが、これはスペイン語には前舌高母音が/i/しか存在せず、さらにまた母音の長短の差が音素的ではないことから、英語のFLEECEの緊張母音/i:/とKITの弛緩母音/i/が共に緊張母音/i/で実現されるのであろう (調査例3.2.3, 3.2.5を参照)。他にも母音領域の比較からは、同様にFOOTとGOOSEの母音の後舌円唇高母音[u]としての実現、DRESSの母音の、米音よりも舌の位置の高い[e]としての実現 (調査例3.2.2, 3.2.5を参照)、THOUGHTの母音の後舌円唇中母音[o]としての実現など、様々な干渉が予測される。また、スペイン語にはFACE, GOATの母音に相当する二重母音が存在しないことから、それぞれ単母音化されて[e][o]として実現されることもあり得る (調査例3.2.2, 3.2.5を参照)。さらに、スペイン語には弱母音が存在しないことから、英語では弱母音が出現するべき音節に強母音が用いられることが予測されるが、Fought (2003: 64, 82) にもtogether, because

の第一音節がそれぞれ [tu], [bi] となる例が示され、さらにはSTRUTの母音/ʌ/と弱母音の/ə/がともに [a] として実現されるとして、lucky[laki], husband[hasbend] などが挙げられている。これは同様に5母音の体系で弱母音を持たない日本語の母語話者の英語発音にも共通する現象として、極めて興味深い。

2.5.2 子音の干渉

子音に関しては、スペイン語には存在しない英語の子音音素/ʃ//ŋ//z//θ/¹³⁾/ð//v//h/などの発音にスペイン語の干渉が予測される。shipの/ʃ/が/tʃ/と発音されてshipとchipが同音になるであろうことは容易に考えられるのだが、Martínez (2006: 82) には/ʃ/と/tʃ/の交替の例が挙げられている。すなわち、「showはchoのように、checkはsheckのように聞こえる」というのである。checkがsheckのように発音されるのは一種の過剰修正 (hypercorrection) の結果とも考えられるが、興味深い現象である。¹⁴⁾ [z] はスペイン語では/s/の異音としてmismo <同じ> のような語に現れるが、音素/z/は存在しないので、英語の/z/が [s] と実現されることは多い (調査例3.2.1, 3.2.5, 3.2.6を参照)。同様に [ŋ] は軟口蓋音の前の/n/の異音としてtengo <(私は) 持つ> などに現れるが、上述の-ingに見られるように軟口蓋音に先行しない英語の/ŋ/は [n] として実現されるであろう。スペイン語に/θ/はなく、また [ð] は/d/の母音間の異音としてcada <それぞれの> などに出現するが音素としては存在しないため、英語の/θ//ð/→[t][d] (厳密には歯音の [tʰ][dʰ]) への置き換えが予想され、Fought (2003: 68) もスペイン語母語話者の発音としてthink, somethingの [tʰ] およびthen, there'sの [d] を挙げている。¹⁵⁾ スペイン語に/v/がなく、綴り字vはbと同じに/b/と発音されることから、英語の/v/→[b] への置き換えが予測される (調査例3.2.6参照)。スペイン語における/h/の欠如からは、英語の/h/の脱落、あるいは無声軟口蓋摩擦音 [x] および無声硬口蓋摩擦音 [ç] の代用が予想されるが、Fought (2003: 83-84) にはhome[xom], he[xi]¹⁶⁾, herslef[xəself] など、/h/→[x] の例のみが示されている (調査例3.2.6参照)。

スペイン語にはrosa <バラ>, perro <犬> に現れるような顫動音の/r/と、pero <しかし> に現れるような単顫動音の/r/が存在するが、英語の/r/(音声的には [ɹ]) はいずれとも異なっている。一般には「そり舌」音とされることが多いが、大きく分けて二種類の調音方法が存在することが判明しており、ひとつはそり舌の調音、もう一方は舌全体を後ろに盛り上げるようにして行われる調音方法であるが、聴覚的には区別が付きにくいとされる (竹林 1993)。いずれの調音方法にせよ、英語の/r/の特徴は舌先が歯茎にいちども接触しないことで¹⁷⁾、これは世界の言語の/r/の中では特異な存在であると言ってよい。

スペイン語の母語話者が英語の/r/を発音する際に予測されることは、語頭のrと語中のrrの綴り字に顫動音の [r] を用いてしまうことと、その他の位置のrの文字には、母音の後であっても単顫動音の [ɹ] を用いてしまうことなのだが (調査例3.2.6を参照)、ヒスパニック英語の特徴としての/r/の実現については先行研究に指摘が見られず、子音脱落の例のwould run[wu ran], /z/→[s] の例のyears[jɪrs] など (いずれも顫動音 [r] として実現)、他の事例に散見されるにすぎない (Fought

2003 : 84-85)。

2.5.3 音節構造による干渉

音節構造の点からは、頭部子音連続として/s/+p, t, k/(+r/) の許されないスペイン語の影響で、英語のそのような子音連続で始まる語に対しては語頭に母音を添加して/s/と/p, t, k/の間に音節境界を生じさせることが予測され、清水 (1979) の借用語の例ではspeech→espiche, strike→estrai queのような例が見られたが、Fought (2003) もspentに対する [əspent] を挙げている (調査例3.2.5を参照)。スペイン語では語末にも子音連続が許されないため、lastやfirstの/t/が脱落したり、hopedなど、動詞の過去・過去分詞形の/-t/も脱落しやすいと予測される。

3. フレスノ (Fresno) 市における調査

3.1 調査の概要

2010年9月に、カリフォルニア州フレスノ市において面接調査を行った。2005年の統計によれば同市の人口は858,948人、うちヒスパニック系住民は404,354人と約47%を占めている。調査の主たる目的は、今後の研究の指針とすべく、ヒスパニック系住民の英語発音におけるおよその傾向を探ることであった。調査の方法は、まず出身地や出生年度を含めて自分の言語的背景を話してもらい、その後簡単な文章と単語のリストを読んでもらうという形をとった。協力者は市内在住の個人宅において3名、オールタナティヴスクール (カリキュラム制公立高校) であるJ. E. Young Academic Centerにおいて7名、カリフォルニア州立大学フレスノ校 (California State University, Fresno) において1名の計11名が得られた。インタビューは原則として英語の問いかけに英語で答えてもらったが、被験者によってはスペイン語へのコードスイッチングを行うことがあり、それに応じて筆者もスペイン語を使用し、次の質問でまた英語に戻すという形で、彼らの話す英語の、原稿なしでのフリートーキングの発音と、原稿読み上げの発音の両方をOlympus Linear PCM Recorderに収録した。読み上げに用いた原稿は資料1、資料2の通りであるが、資料2は2.5に述べた/r/について、色々な位置における実現を明らかにすることを主眼に作成されている。上記11件のうち比較的収録状態の良い6件について、個々の事例を以下に概観するが、音声的特徴に関する記述は筆者の聴覚判断に基づくもので

資料1 : 読み上げに使用した文章

The North Wind and the Sun were disputing which was the stronger, when a traveler came along wrapped in a warm cloak. They agreed that the one who first succeeded in making the traveler take his cloak off should be considered stronger than the other. Then the North Wind blew as hard as he could, but the more he blew the more closely did the traveler fold his cloak around him; and at last the North Wind gave up the attempt. Then the Sun shined out warmly, and immediately the traveler took off his cloak. And so the North Wind was obliged to confess that the Sun was the stronger of the two.

資料2：単語読み上げリスト

1. rib	14. mirror	27. problem	40. poor
2. red	15. miracle	28. cry	41. store
3. rat	16. very	29. green	42. pork
4. rock	17. berry	30. fruit	43. fur
5. read	18. parasol	31. shrimp	44. nurse
6. rug	19. carry	32. street	45. earth
7. race	20. story	33. spring	46. bird
8. right	21. sorry	34. screen	47. father
9. road	22. courage	35. car	48. mother
10. room	23. hurry	36. card	49. doctor
11. read	24. try	37. hear	50. calendar
12. rare	25. dry	38. pear	51. a pair of shoes
13. roar	26. bread	39. pears	52. number eight

ある。なお、比較資料のために、カリフォルニア州で生まれ育った63歳のアングロの女性にも資料1, 2の読み上げを依頼した。

3.2 個々の事例

3.2.1 Roman (以下、協力者名はすべて仮名)

出 生 地：メキシコ合衆国（以下、メキシコ）Jalisco州

年 令：22歳

職 業：学生

言語的 背景：7歳頃に一家でカリフォルニアに来て、小学校に入って英語読み書きを習う。英語は上手になっていたが、8歳でメキシコに戻り、1年半メキシコに住んでから戻ってくると英語が話せなくなっていた。10歳で戻ってきて1年ほどかかってもどのように英語が使えるようになる。

カリフォルニアで高校までを終え、その後地元の大学に進学。

家庭での言語：スペイン語

発音の特徴：

- KITの母音が緊張母音となる傾向はなく、rib, shrimp, springの母音も米音と同じ音質。
- poorとstoreの母音が同じで、両方とも [oə]
- cloak (米音/klouk/) の母音が二重母音でなく [v:]。読み方をためらっていたことから、このあまり馴染みのない語が読めなかった可能性もある。
- mirrorが [miə] となり、語中の /r/ が脱落。rrの綴り字に対して顫動音 [r] を発音しまいとするhypercorrectionか？ (berry, carryなどでは問題なく [ɹ] を発音)
- pear, pearsを [p^hiə], [p^hiəs] と読む。earの綴り字の読み方としてはやや例外的なので読めなかった可能性も。語末の /z/ が [s] となっているのは、無声化が著しいのか、/z/ の無い

スペイン語の名詞複数語尾の影響か？

- f. springのみ、/r/が単頭動音 [ɾ] であった。頭部子音連続spr-を許容しない母語の制約のためにやや困難があり、典型的な解決法であるes+pringとまではいかなくてすんだものの、rがスペイン語の単頭動音として実現されたのであろう。street, screenでは問題なく [ɾ] であった。
- g. stronger/-ŋgə/となるべきところ、/g/が脱落。

概 観：いわゆる「臨界期」以前にメキシコから移住してきているだけに、概してスペイン語の干渉はあまり認められないが、/r/の発音にときおり困難を呈する。やや例外的な綴り字が読めない。複数語尾/z/の無声化が激しい。

3.2.2 Irene

出 生 地：米国 サン フアン カピストラノ (San Juan Capistrano) (カリフォルニア州)

年 令：67歳 女性

職 業：教師

言語的背景：母親は米国生まれ。父親はメキシコ生まれで14歳の時米国に移住。

家庭ではスペイン語で育てられたが、Ireneが小学校に入る頃から両親は英語でIreneに話すようになった（子供が、最初はスペイン語を覚えるようにとの配慮）。

Ireneは小学校1年から、学校で他の子供と一緒に英語をおぼえていき、カリフォルニアで大学まで終える。

家庭での言語：スペイン語

発音の特徴

- a. confess, attempt, very, berryなどでDRESSの母音が高め (2.5.1を参照)。5母音の体系のスペイン語の/e/はGAの/ɛ/よりも舌の位置が高いのでこの影響とも考えられる。
- b. /r/に関しては語中の位置、綴り字にかかわらず、英語の接近音 [ɹ] となっていた。

概 観：Ireneの発音には、DRESSの母音はやや高めであること以外にはスペイン語の干渉は見られない。They wanted to make sure that we spoke Spanish first.というIreneの言葉に表わされる、彼女の両親のスペイン語維持に対する姿勢、そして小学校入学と同時に英語に切り替えて、米国社会で生きていくための配慮は注目に値する。

3.2.3 María

出 生 地：米国 マデラ市 (カリフォルニア州)

年 令：69歳 女性

職 業：教師

現在の家庭での使用言語：英語・スペイン語

言語的背景：両親はメキシコ出身。Maríaが小学校に上がるまでは家庭でスペイン語で話し、そのあと英語に切り替えた。8人兄弟の末っ子で、兄達の話す英語、ラジオの英語などを

世界の諸地域の英語

聴いて自然に2言語使用者となるが、やがてスペイン語を忘れかけた。すると7年生か8年生のとき、両親が彼女をメキシコシティに連れて行き、2ヶ月ほど滞在。これによりスペイン語を取り戻す。成人後、仕事でメキシコのプエルト・バジャルタに3年滞在。読むのは英語のほうが速いがスペイン語でも読む。語彙が足りないのを自覚しており、辞書を引きながらスペイン語を読んでいる。書くのは断然英語。

発音の特徴：

- a. I think...と言ったときのthinkの母音が緊張母音 [i] であったが (2.5.1を参照)、読み上げリストのribやshrimpではそのようなことはなかった。
- b. berryを [beəri] と発音したのは標準的なGAと顕著に異なる点であった (その前のveryは [veəri])。rrの綴り字に過剰反応して混乱したかとも考えられるが、carryやsorryではそのようなことはなかった。/r/の音自体はGAの [ɹ] で、スペイン語の干渉は認められない。

概観：Mariaの英語の発音には、スペイン語の干渉はほとんど認められない。スペイン語維持への両親の配慮は、Ireneのケースと並んで注目される。またMaria自らも、It's easier to get away from itと言い、辞書を引いて語彙の乏しさを補いつつスペイン語を読む積極的な努力をしており、スペイン語維持への意識の高さが認められる。

3.2.4 Otto

出生地：エルサルバドル

年齢：50歳 男性

職業：教師

現在、自分の家庭では英語 両親の家ではスペイン語を使用

言語的背景：10歳半で米国へ。英語は数を数えるくらいしかできなかった。笑われながら英語を習得。楽に英語が使えるようになるまでに4年かかった (友達が助けてくれた)。米国で大学まで卒業。現在、話すのはスペイン語が楽、読み書きは二言語が同程度。

発音の特徴：

- a. KITの母音がshrimp, mirror, ribなどで緊張母音 [i] (2.5.1参照)
- b. GOATの母音がfold, cloakで [o:] であったのは2.5.1に述べた二重母音の単母音化とも考えられるが、roadでは二重母音となっていた。Romanと同様、cloakの綴り字が正しく読めなかった可能性も考えられる。

概観：10歳半という年齢で英語習得を始めたにしては、母音の一部を除いてはスペイン語の干渉は殆ど認められない。/r/も問題なく [ɹ] で発音されていた。

3.2.5 Rosa

出生地：メキシコ メヒカリ (Mexicali) (バハ・カリフォルニア州)

年齢：56歳 女性

職 業：公立学校主事

現在の家庭での使用言語：英語・スペイン語

言語的背景：11歳の時に米国に来る（カリフォルニア州マデラ市）。Hello, Hiくらいしか英語は知らなかったのが4年生に入学，1年経って他の科目が優秀だったので6年生に飛び級する。楽に話せるようになるまで4年かかった。母親は米国生まれ，学校も米国（高校まで），バイリンガルだったので子供達の英語習得を助けてくれた。大学を出てから20代半ばで英語・スペイン語の比重が逆転（My brain made a switch.）。頭の中で英語→スペイン語の翻訳をして理解していたのが，スペイン語→英語への翻訳に逆転したという。読み書きは両方できるが英語のほうが楽。同僚など，相手によってスペイン語も話すが現在の第一言語（primary language）は英語。メキシコの親戚と話す時も，スペイン語のTV番組を見る時も，常にわからない単語がある。英語もまだ学習中（still learning）である。

発音の特徴：

- a. cloak, soの母音が [o:] であったが，他のroadなどGOATの母音を持つ語では二重母音が発音されていた。GOATの二重母音の単母音化が，時により起こるケースかもしれない（2.5.1を参照）。
- b. numbers, always, staysにおいて，語末子音が [s] であった。（2.5.2を参照）
- c. 本人はshrimp, street, spring, screenの語頭の子音連続の発音が困難だと言い，実際の発音では語頭の摩擦音がやや長めとなっていた（2.5.3を参照）。語頭に [e] のような母音添加をする代わりに，語頭の摩擦音を長くすることで音節主音的な機能を持たせ，/r/を含む子音連続（shrimpの場合は/r/のみ）との間に音節境界を生じさせているとも考えられる。

概 観：わずかにスペイン語の影響が散見されるが，同じ条件化で規則的に干渉が生じているわけではない。おそらくは常に客観的に自分の言語を観察し，発音の癖も常に意識して修正しているのではないと思われる。

3.2.6 Roberto

出 生 地：ベネズエラ プンタ カルドン（Punta Cardon）

年 令：58歳 男性

職 業：教師（数学）

現在，家庭で使用する言語：スペイン語80%，英語20%

言語的背景：22歳で留学生として米国に。故国で工業高校を出ていたが，外国語は必修ではなかったので，英語は技術用語しか知らなかった。サクラメント州立大の電子工学科に入学する前に英語の集中講座を受け，pattern practice（pit, pat, pot, putt etcの発音練習）をさせられる。

自分の英語力が進歩したな，と思えるようになったのは3年後だが，30年経った今も

学習中 (I'm still learning English)。現在、会話・聴き取りに不自由はないが英語だと集中しなければならない。英語で考えることはまだ出来ず、いつもスペイン語から翻訳している (switch back and forth constantly)。自分の思考のベースはスペイン語。数学もスペイン語で憶えたからスペイン語でしか考えられない。

発音の特徴:

- a. /r/の発音に顕著なスペイン語の干渉が認められ、2.5.2で予測したような現象がほとんどすべて起こっている。すなわち、語頭の/r/は顫動音 [r] あるいは [ɾ] となり、母音の後のrは [ɾ] で実現される。しかし、語中でrrのつづりを持つberry, carryなどでは [r] でなく [ɾ] で発音される。
- b. KITの母音がshrimp, spring, rib, さらにhimにおいてまでも緊張母音 [i] (2.5.1参照)
- c. DRESSの母音がattempt, then, redなどで舌の位置の高い [e] (2.5.1参照)
- d. LOTの母音がGAの [ɑ] よりも舌の位置が高く円唇の [o]。しかしSTRUTの母音との混同はなく、こちらは [ʌ] となっている。pattern practiceなどの成果か?
- e. veryの語頭子音が [b] (2.5.2参照)
- f. threeの/θ/が [t] となって [tri:]。しかしNorthやthenでは/θ//ð/が実現。
- g. /h/の脱落は無く、むしろ通常脱落するような位置の...around him.でも [çim] となっていた。また、読み上げリストのhearでは、言い始めるまでにやや時間がかかった後に [çiər] と発音していて、母語にない/h/の音を強く意識して発音していることが窺える。
- h. pears, numbers, always, staysなど、殆ど全ての語末の/z/が [s] であった。(2.5.2を参照)
- g. 語頭の子音連続では、street, spring, screenにおいて、無声閉鎖音と [ɾ] の前にわずかに [ə] が聞かれた。

概観: 今回の調査の中で、もっとも強くスペイン語の干渉を示したが、これは英語習得開始年齢が22才と並外れて高いことによるものであろう。しかしながら/θ//ð/の実現には殆ど干渉が認められず、母音に関してはKIT, DRESS, LOTの母音の舌の位置が高いものの、STRUTの母音とLOTの母音の混同はない。

言語に対する意識の点では、Robertoもまた自分の言語使用の状態を客観的に分析している点で、RosaやMariaと共通している。

3.3 調査のまとめ

子音に関しては、顕著な干渉を予想して読み上げ資料を準備した英語の/r/の実現に、成人後に英語習得を始めたRoberto以外には規則的な干渉は認められなかった。同様に体系上は当然干渉が予想される/θ/と/ð/に関しても、実際には殆ど干渉例が見られず、わずかにthreeにおいて上記のRobertoが/θ/を [t] にしていたのみであり、また/ʃ/では全く干渉例が見られなかった。この一方で、上記のような子音の実現に干渉が認められないような話者においても、語末の/z/が [s] として実現される現象が見られるのは注目すべきことであり、これにはスペイン語の複数語尾-s/s/の存在が影響し

ている可能性も考えられる。

母音に関しては、KITの母音が緊張母音 [i] となる現象が、頻度の差はあるが3名に、またDRESSの母音の舌の位置が高い現象が2名に見られたが、上記のRoberto以外では、他の面での干渉がほとんど認められない話者にも前舌高母音の実現に干渉が見られるのは興味深い。二重母音の単母音化は話者により散見されるものの、一貫した現象としては認められなかった。

音節構造に関する干渉では、語頭の子音連続にやや困難を呈する例があり、無声摩擦音の長音化、無声閉鎖音と/r/の間に短い [ə] の挿入などがみられたが、いずれも一貫した現象ではなく、また語頭の母音添加などは皆無であった。

スペイン語維持に関しては、1名を除いて全員が家庭でスペイン語を話しており、また協力者の親の世代が子供にまずスペイン語、次に英語を身につけさせようと配慮したエピソードも3名から聞くことが出来た。

終わりに

以上、ヒスパニック系住民の現在の状況、とりわけ言語使用と関るようないくつかの側面について統計資料に基づいて概観したのち、英語とスペイン語の体系の比較から予測される干渉について考察し、最後に小規模ではあるがフレズノ市における面接調査により、主としてヒスパニック英語の発音について、スペイン語を母語とする6名の例を検討した。米国生まれが3名、外国生まれが3名、年齢もまちまちではあったが、なんらかのスペイン語による干渉がどの協力者にも認められ、干渉の程度には/r/の実現のように英語習得開始時期が顕著に相関していると思われるものもあり、また前舌高母音の舌の位置・語末の/z/の [s] としての実現のように、英語習得開始時期、あるいは全体的な英語発音の習熟度とは必ずしも関係なく生じていると思われるものも認められた。スペイン語から英語への干渉の中で、どのようなものが早期に解消し、どのようなものが根強く残るのか、さらにそこに働く要因にはヒスパニック英語に特有のものがあるのか否かは、今後の課題として追求したい。

今後は成人の移民を含め、広範囲な社会階層のヒスパニック系住民の英語発音の特徴を把握するために、今回のような専門的職業を持つ人々に限らず、広く協力者を獲得すること¹⁸⁾、またアングロの英語話者のデータも多く集めたうえで、今回の予備的調査で全体的習熟度にあまり相関なく干渉の見られた前舌高母音と/z/の実現に関して、詳細な音声分析を行うことを考えている。

[注]

1. 以下、特に必要のない限りは「米国」とする。
2. 「ヒスパニック系住民」とは「スペイン語圏の各地を出自とする米国在住の人々」を指すものとする。詳しくは清水（2009）を参照。
3. わが国の報道では「優良な不法移民に永住権」（2010年12月12日、朝日新聞見出し）に見られるように

世界の諸地域の英語

「不法移民」という用語が用いられているが, undocumented immigrantsとは本来, 「入国に必要な書類を持たない移民」という意味であり, 積極的な犯罪性を示すものではない。本論では以下, 「非合法移民」という用語を用いる。

4. 以下, 統計的数字には「非合法移民」の数は反映されていないことになる。
5. カリフォルニア州の北部の小都市Fortisにおける調査。
6. 「出自国」という表現は, 出生地の米国内・米国外を問わずに祖先の出身国を示すのに用いることとする。
7. 原音は [meçikáno]。この [ç] の部分はドイツ語のichのchの部分また日本語の「ヒ」の子音とも似た音だが英語にはなく, これが英語でもっとも近い [tʃ] に置き換えられ, 最初の音節が脱落して [tʃikáno] となり, これを表わす綴りとしてchicanoが定着したものであろう。
8. Youmans (2007) は, 標準的な英語におけるcouldにみられる「示唆」の意味での用法の出現頻度について報告しており, 2万回のcouldの出現に対してヒスパニックの英語では3.11回, アングロの英語ではその12倍以上の37.33回という驚くべき差を示している。
9. 英語の前置詞の用法が, 逆にスペイン語に影響を与えたとみなされる例も報告されている (García 1995)。
10. しかし筆者の考えでは, スペイン語に音素/ŋ/は存在せず, /n/が軟口蓋音に先行する場合の異音として [ŋ] が現れるに過ぎないので, 語末の/ŋ/が [n] となるとしてもそれはスペイン語の干渉かもしれない。同様に, メキシコを含む中南米のスペイン語には/θ/がないので, 調音位置の近い無声摩擦音 [f] に置き換えて発音するのだとも考えられる。
11. 両言語とは英語とスペイン語をさすが, 特に限定する必要のない限りは一般米語 (GA) と中南米のスペイン語とする。
12. 以下, 母音音素を示すための例語として広く用いられている, Wells (1982) のKeywordsを用いることとする。これにより, 「KITの母音」, 「DRESSの母音」などのように表わすことができ, 英語の変種間の発音の比較をすることが容易になる。
13. メキシコのスペイン語には/θ/は存在しないが, スペインのスペイン語では/s/に対立する音素/θ/がある。
14. Fought (2003: 82) も同様の指摘をしており, 彼女は語頭のほうが若干破擦音 [tʃ] の出現が多いようだが断定は出来ないと述べている。
15. /θ//ð/→[t][d] の実現は黒人英語にも顕著であるが, /t//d/が歯音であるスペイン語を母語とするヒスパニック系の発音のように [t][d] とはならない。
16. 前舌高母音に先行しているので音声的には [çi] となるはずである。
17. しかし英語でも, a pair of shoes, number eightなど, いわゆる 'linking r' (つなぎのr) の位置では単顎動音の [ɹ] が出現することがある。
18. 成人の移民のなかには非合法移民と推定される人々も多く, 庭師や通いのハウスキーパーなどとして働いているが, 非合法移民を摘発するために, アンケート調査のよう形での「罨」が用いられることもあるといわれており, そのためか彼らは非常に用心深く, 応分の謝礼を申し出ても調査に協力しようとしなかった。

参考文献

- García, M. 1995. 'En los sabados, en la mañana, en veces: A Look at *en* in the Spanish of San Antonio'. In *Spanish in Four Continents*. Silva-Corvalan, C. (ed), Washington D.C: Georgetown University Press.

- García, O. and M. Cuevas. 1995. 'Spanish Ability and Use Among Second Generation Nuyoricans'. In *Spanish in Four Continents*. Silva-Corvalan, C. (ed), Washington D. C: Georgetown University Press.
- Fought, C. 2003. *Chicano English in Context*. New York: Palgrave MacMillan
- Hammond, R. M. 2000. 'The Multiple Vibrant Liquid in U. S. Spanish'. In Roca, A. (ed), *Researches on Spanish in the United States: Linguistic Issues and Challenges*. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Hidalgo, M. 2008. 'Indicators of bilingualism and identity'. In *Bilingualism and Identity*. Niño-Murcia, M. and J. Rothman (eds). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hudson, A. et al. 1995. 'the Many Faces of Language Maintenance: Spanish Language Claiming in Five Southwestern States'. In *Spanish in Four Continents*. Silva-Corvalan, C. (ed), Washington D. C: Georgetown University Press.
- Krashen, S. 2000. 'Bilingual Education, the Acquisition of English, and the Retention and Loss of Spanish'. In Roca, A. (ed), *Researches on Spanish in the United States: Linguistic Issues and Challenges*. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Martínez, G. A. 2006. *Mexican Americans and Language*. Tucson: The University of Arizona Press.
- Morgan, T. A. 2010. *Sonidos en contexto*. New Heaven: Yale University Press
- 村田勝幸. 2007. 『〈アメリカ人〉の境界とラティーノ・エスニシティ』東京：東京大学出版会
- New Strategist Publications INC. 2007. *Who we are Hispanics*. New York: New Strategist Publications INC.
- Niño-Murcia, M. and J. Rothman (ed.). 2008. *Bilingualism and Identity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Oboler, S. 1995. *Ethnic labels, Latino Lives: Identity and the Politics of (Re) Presentation in the United States*. Minnesota: University of Minnesota Press.
- Polkinhorn, H. et al. 2005. *EL Libro Decalo: The Dictionary of Chicano Slang* (Revised Edition). Los Angeles: Floricanto Press.
- Santa Ana, O. 1993. "Chicano English and the Nature of Chicano Setting." *Hispanic Journal of Behavioral Sciences* 15.
- 清水あつ子 1979 「スペイン語における英語借用語の音声について(2)」 *LEXICON* No. 8, 30-44. 東京：岩崎研究会
- Stavans, I. 2003. *Spanglish: The Making of a New American Language*. New York: HarperCollins.
- 竹林滋 1993 『英語音声学』東京：研究社
- Toribio, A. J. 2000. *Once upon a time en un lugar muy lejano...* 'Spanish-English Codeswitching across Fairy Tale Narratives'. In Roca, A. (ed), *Researches on Spanish in the United States: Linguistic Issues and Challenges*. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Wells, J. C. 1982. *Accents of English* 1. Cambridge: CUP
- Weyr, Thomas. 1988. *Hispanic U.S.A. Breaking the Melting Pot*. New York: Brandt & Brandt Literary Agents Inc. [浅野徹訳『米国社会を変えるヒスパニック』1993. 東京：日本経済新聞社]
- Youmans, M. 2003. *Chicano-Anglo Conversations*. New Hampshire: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

ウェブサイト：

Bureau of Labor Statistics, 2006 Current Population Survey. Internet site <http://www.bls.gov/cps/home.htm>

Bureau of the Census, 2006 Current Population Survey Annual Demographic Supplements, Internet site <http://www.census.gov/hhes/www/poverty/histpov/histpov2.html>